068 「中大セミナー」のはじまり

一九五九（昭和三十四）年七月十八日から二十二日の五日間、軽井沢星野温泉で第一回中央大学学内セミナー（中大セミナー）が、学生五一人（女子一四人）と教職員（講師・助言者）一六人が参加して開催された。夏期休暇を利用し、学生と教職員が起居をともにし学生生活に関する諸議題の研究討議を行い、学生生活の充実・学園の発展に寄与する目的で、「大学生活をいかに過ごすか」を主題に行われたのである。

教授の講義（「大学の理念」桑木文学部教授・「大学教育と学生部」久松法学部教授・「学生の社会的責任」小松法学部教授・「自然科学的世界観」福田工学部教授）と質疑応答、「先生を囲む会」、学生が一〇人ずつの分団に分かれての分団討議（グループディスカッション）、親睦会、対立討議、レクリエーション、キャンプファイヤーなどが四泊五日間の主たる内容であった。

この催しは、「大学共同体」という理念のもとに教員・職員・学生が大学の健全な発展に寄与しようという日本学生奉仕団（WUS）のセミナー活動に参加して影響を受けた学生たちが提案し、同年五月に学生部中心に結成された中央大学セミナー準備委員会によって計画が進められてきたものであった。

六〇年安保問題で社会が騒然としていた当時、学内ではたいへんなマスプロ教育で多数の学生が教室に入りきれない「立ちんぼ授業」があたりまえになっていた。ちなみに、五八年度から六〇年度の本学には総定員数の約二・四倍にあたる約三万三千人の学生が在籍していた。このような状況の中で「教員と学生あるいは学生間の交流の必要性」を訴える声が大きくなり、学生部の協力によってセミナーの実現にいたったのである。

第一回の学内セミナーは好評のうちに終わり、早くもその年の十二月二十五日から第二回セミナーが伊豆片瀬町清美荘で「学生生活の充実、学園の発展に寄与する」という目的のもと、学生六五人、教職員一八人が参加して四日間開催された。

第三回は翌六〇年三月七日から「学生と教養」をテーマとして銚子市犬吠埼の暁鶏館において三泊四日で実施された（学生五八人、教職員一四人参加）。これらのセミナーはおおむね好評で、終了後の参加学生の交流も盛んになったようである。

六〇年三月の評議員会でセミナーを中心とした学生関係費が大幅に承認された結果、中大夏季セミナーとして大規模な行事に発展していった。多くの学生が参加できるように、七月一日から二十八日までの間に長野県の軽井沢、蓼科、木崎湖の三ヵ所で計一六回に分け、それぞれ五〇人を定員として三泊四日で開催された。「学生生活をいかに過ごすか」を主題に、八〇人の教職員の協力のもと約七〇〇人の学生が参加したのであった。

意義あるはじめての試み
第一回学内セミナー開く
学生の熱意が実を結ぶ
会場は軽井沢星野温泉
大学の理念を講義
成功に終った五日間
熱気は最後の電車に残る
税務会計科募集

第１回学内セミナーの開催を伝える
『中央大学新聞』第533号

このような中大セミナーは夏季、冬季、春季と恒例化していくことになるが、参加者の中から学園の諸活動に積極的に参加する学生が多く現れてくる。「セミナー族」とも呼ばれた彼らの活動は、上級生が新入生の案内役となるS・C（スチューデント・カウンセラー＝学生相談員）活動や青年像建設運動などに象徴されている。

六〇年十一月の『中央大学新聞』は、中大生を「自治会族」「スポーツ族」「司法試験族」「セミナー族」に分類している。同紙は、セミナー参加者の発議によりこの年の新学期からS・C制度が発足し、一ヵ月間、学内四ヵ所で常時「S・C」の腕章をつけた相談員が新入生の相談に応じたことや、六一年十一月に駿河台校舎中庭に学園のシンボルとして建設されることになる「青年像」の募金活動を進めたメンバーの約七割がセミナー出身者であったことなどを紹介して、「『中大を動かすもの』のひとつに自治会族とは対象的（照）な意味で、セミナー族は存在する」と位置づけたのであった。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。